

2012 年 7 月 21 日～28 日の期間、平成 24 年度海外研修派遣会員としてスタンフォード大学での Summer Symposium on State-of-the-Art-Imaging に参加する機会を得たので報告する。

本研修に参加した主な目的は、「最先端の High Field MRI を学ぶこと」「同士を作ること」であった。本研修では、世界トップレベルの講師陣によるレクチャーに加え、最先端の研究施設やリニアック装置の工場見学、さらには 7T-MR でのスキャン体験などを体験することができた。Neuro Imaging に興味を持っている筆者にとって、7T-MR でのスキャン体験と Dr. Moseley のレクチャーはとても興味深いものであった。スタンフォード大学の講師陣から多くのことを教授いただいたが、筆者が特に着目したのは巧みなレクチャー手法である。ユーモアたっぷりの Dr. Moseley をはじめ、Dr. Shuhendler (写真) のレクチャーでは Molecular Imaging の世界に完全に引き込まれ、話術を含めたプレゼンテーション能力を磨く必要性を再認識した。全体を振り返ってみると、非常に充実したプログラムであった。スタンフォード大学における M.D.—Technologist—Ph.D の研究体制は、日本でも十分に参考にできる。優秀な Technologist を擁する本邦において、このような研究体制を多くの施設で構築できれば、世界を先導できる！と期待が膨らむばかりである。

本研修では、夜な夜な「学会の国際化」および「学会のあり方(私たちが目指すべき学会)」というテーマについてディスカッションを行った。これらは別個のテーマとして取り上げられたが、切り離して考えることはできなかった。「学会の国際化」を目指すことへの賛成意見は多く出たが、時期尚早であるとの意見もあり、結論を出すには至らなかった。一方、「学会のあり方」に関しては、“演題採択数を絞るべきか？”と“教育講演のあり方”の 2 点が議論の中心にあった印象を受ける。学会のレベルを向上させるためには、“演題採択数を絞る”ことは非常に有効である。しかし、若手が研究発表できる場が失われてしまうことも懸念されたとの意見も出された。この影響は、学会が国際化された場合、より顕著に現れると予想される。したがって、「学会の国際化」を進めるためには、まずは“学会のレベルを向上させる”ことが優先されるべき事項と考えられ、今後はそのような方向性が望まれる。また、“教育講演のあり方”に関しても様々な意見が出された。教育講演を増やした方が良いとの意見もあれば、学術集団として学会大会を開催するのであれば、研究発表を主体とし、教育講演は不要であるとの意見も出された。いずれにせよ、その多くは、若手教育が着眼点にあったように感じる。近年の教育講演では、教科書や参考書などに載っているすでに確立された内容が多いとの意見も出された。実際、教育講演を聴講する人は勉強熱心な人であり、すでに教科書などで情報収集していることが多い。実際に知りたい内容は、それらの情報を臨床応用するための考え方や Tips ではないか？との意見が出された。教育講演は、学会大会プログラムにおいて大変魅力的なセッションの 1 つである。今後、学会大会における教育講演のあり方が問われてくるのかもしれない。

本研修で得たことは数多く、容易には並べきれない。敢えて 1 つを挙げるとするならば、寝る間を惜しむ程に派遣メンバー(同士)との濃密な交流が、筆者にとって最も大切な時間となった。それぞれが異なるバックグラウンドを持ち、考え方も異なるため、意見が対立することもあった。しかし、診療放射線技師の将来像や新人教育に対する思いなど、目指している方向は同じであり、自身の考え方を再考する良い機会であった。この同士との出会いは、研究活動を行う上でも重要なものになると思われる。研究分野が異なっていたとしても、同士の頑張っている姿は自身にとっての活性剤になるであろう。お互いに刺激し合い、研究活動をアクティブに遂行していきたいと考えている。現在、筆者は診療放射線技師教育に携わっている。この経験を、診療放射線技師の金の卵にわずかでも伝授できれば、社会(臨床)に出る際には金の卵が孵化し、国際化を視野に入れた金の雛として羽ばたいてくれるものと信じている。今後は、金の卵に国際化に対する意識付けを行える教育環境を整えていきたいと考えている。

最後に、本研修に多大なるご尽力をいただいたスタンフォード大学の先生方、日本放射線技術学会ならびに GEHC-J の関係者の方々、同士を引率していただいた金沢大学の田中氏、そして共に過ごした同士に厚く御礼申し上げます。

